

二〇一八年度・学力考查問題【国語】

(中学帰国生)

注意

- 一、試験時間は2科目合わせて80分です。
 - 二、答えはすべて解答用紙にはつきりと記入しなさい。
 - 三、解答用紙のみ試験終了後集めます。
 - 四、問題は10ページでⅠ・Ⅱ・Ⅲの三題あります。開始の合図で必ず確認し、そろっていない場合にはすぐに手をあげなさい。
 - 五、本文の表現については、作品を尊重し、そのままにしてありますが、設問の都合上、省略した部分、表記を改めた部分があります。
- また、特に指示のないかぎり、句読点も一字に数えます。

—
次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学校で行われる野球教室の前日、「僕」と「安斎」は、指導にあたる予定のプロ野球選手（一流打者「打点王氏」）に対して、担任の「久留米」から何かと冷たくあたられている同級生の「草壁」のことを野球の素質があると言って褒めてほしいと強引にお願いをしていた。

打点王氏は、僕と安斎に気づくと顔を少しひくつかせた。前日、タクシーに乗り込んできた二人だと分かったのだ。「昨日はどうも」と挨拶する様子で、笑みも浮かべた。「どれ、振ってごらん」と声をかけてくる。

僕は、うん、とうなずき、バットを構えたが、「うん、じゃなくて、はい、だろ」と横から指摘された。見れば久留米が立っていた。スポーツウエア姿も様になり、打点王氏の隣に立つと、コーチのように見える。

「はい」僕は慌てて、言い直す。ろくな素振りではできなかったが、打点王氏は笑うこともなく、「もう少し、顎を引いてごらん」とアドバイスをしてくれた。「体の真ん中に芯があるのを意識して」

はい、と答えてバットを振ると、僕自身は変化が分からぬものの、「うん、そうそう」と褒められる。安斎も、僕と似たような扱いを受けた。そして、だ。安斎がいよいよ、本来の目的に向かい、一歩踏み出す。

「久留米先生、草壁のフォーム、どうですか」と投げかけたのだ。

久留米は不意に言われたため、小さく驚き、同時に、草壁がどうかしたのか、と醒めた表情も浮かべた。草壁という生徒がいること自体、忘れていた気がすらあった。

草壁は、僕たちのいる場所から少し離れたところにいたが、打点王氏が近づいていくと、緊張のせいなのか、顔を真っ赤にした。

「やっごらん」打点王氏が声をかける。

草壁はうなずいた。

「うなずくだけじゃなくて、返事をきちんとしなさい」久留米がすかさず、注意をした。

草壁はびくつと背筋を伸ばし、「はい」と声を震わせた。

あたふたしながら、バットを一振りする。僕から見ても、不恰好で、バランスが悪かった。腕だけで振っているため、どこか弱々しかった。「草壁、女子じゃないんだから、何だそのフォームは」久留米の声は大きくはないのだが、低く、あたりによく聞こえる。近くにいた生徒が、「草壁、女子みたいだって」と言い、土田か誰かが、「オカマの草壁」と嘲した。安斎が舌打ちをするのが聞こえた。久留米が意図的に言ったとは思わぬが、確かに、そういった発言により、他の生徒たちが、「草壁のことを下位に扱ってもよし」と決めていた筋はある。

安斎は絶るような目で、打点王氏を見上げた。「草壁はどうですか？」と、草壁の名前をはっきりと発音し、昨日の依頼を想起させるように、言った。

打点王氏は眉を少し下げ、口元を歪めた。このスウィングを褒めるのは至難のわざ、と思ったのかもしれない。

「よし、じゃあ草壁、もう一回、やってみなさい」久留米が言ったが、そこで、安斎が、「先生、黙ってて」と言い放った。

久留米は、自分に反発するような声を投げかけた安斎に、目をやった。自分に向けられた槍の切っ先の形を、じっと確認するかのようではあった。むっとしているかどうかとも分らない。

「先生がそういうことを言うと、草壁は緊張しちゃうから」安斎の目には力がこもり、声も裏返っていた。

「こんなことで緊張して、どうするんだ。緊張も何も」

「先生」あの時の安斎はよく臆せず、喋り続けられたものだ。つくづく感心する。「草壁が何をやっても駄目みたいな言い方はやめてください」

「安斎、何を言ってるんだ」

「子供たち全員に期待してください、とは思わないですけど、駄目だと決めつけられるのはきついです」

安斎は、ここが勝負の場だと覚悟を決めていたのかもしれない。立ち向かうと肛を決めたのが分かり、僕は気が気ではなかった。

打点王氏のほうはといえば、大らかなのか、鈍感なのか、安斎と久留米との間で起きる火花を気に掛けることもなく、草壁のそばに歩み寄ると、「もう一回振ってみようか」と言った。

はい、と草壁は顎を引くと、すつと構えた。先ほどよりは強張りはなく、脚の開き方も良かった。

先入観を、と僕は念じていた。そのバットで、吹き飛ばしてほしい、と。

もちろん草壁が、プロ顔負けの美しいスウィングを披露し、その場

にいる誰もが呆気に取られ、草壁がいちやく学校の人気者になる、といった劇的な出来事が起こると期待していたわけではなかった。むしろ、そのようなことは起きなかった。草壁の一振りは、先ほどの腰砕けのものに比べればはるかに良くなっていたが、目を瞠るほどではなかった。

安斎を見ると、彼はまた、打点王氏を見上げていた。

腕を組んでいた打点王氏は、草壁を見つめ、「もう一回やってみよう」と言う。

こくりとうなずいた草壁がまた、バットを回転させる。弱いながら、風の音がした。

「君は、野球が好きなの？」打点王氏が訊ねると、草壁はまた首だけで答えたが、すぐに、「はい」と言葉を足した。

「よく練習するのかな」

「テレビの試合を見て、部屋の中だけど、時々」とぼそぼそ言った。「ちゃんとは、やったことありません」

「そうか」打点王氏はそこで、少し考える間を空けた。体を捻り、安斎と僕に「瞥をくれ、久留米とも視線を合わせた。その後で、草壁の肘や肩の位置を修正した。

草壁が素振りをする。

ずいぶん良くなったのは、僕にも分かる。同時に、打点王氏が、「いぞ！」と大きな、透明の風船でも破裂させるような、威勢の良い声を出した。まわりの生徒たちからの注目が集まる。

「中学に行ったら、野球部に入ったらいいよ」選手は言い、そして、僕たちが望んでいたあの言葉を口にした。「君には素質があるよ」と。

自分の周囲の景色が急に明るくなった。安斎もそうだったに違いない。白く輝き、肚の中から光が放射される。報むくわれた、という思いだったのか、達成した、という思いだったのか、血液が指先にまで辿たどり着く、充足感があった。

草壁は目を丸くし、まばたきを何度もやった。「本当ですか」

その時、久留米がどういう顔をしていたのか、僕は見逃していた。もしかすると、見てはいたのかもしれないが、今となっては覚えていない。

「プロの選手になれますか」草壁の顔面は朱に染まっていたが、それは恥ずかしさよりも、気持ちの高まりのためだったはずだ。久留米の立つ方向から、鼻で笑う声が聞こえたのもその時だ。何か、草壁をたしなめる台詞せりふを発したかもしれない。

「先生、草壁には野球の素質があるかもしれないよ。もちろん、ないかもしれないし。ただ、決めつけるのはやめてください」

「安斎はどうして、そんなにムキになっているんだ」久留米が冷静に、淡々たんたんといなす。

「でも、草壁君、野球ちゃんとやってみたらいいかもよ」※4佐久間がいつの間にか、僕たちの背後に立っていた。「ほら、プロに太鼓判たいこばん押されたんだから」

草壁は首を力強く縦に振った。

恐る恐る目を向けると、打点王氏は僕の予想に反して、明るい顔をしていた。あれは、乗りかかった舟、の気持ちだったのだろうか。それとも、先生と安斎とのやり取りから、嘘うそをつき通すべきだと判断したのか、そうでなければ、草壁の隠れた能力を実際に見抜いたのか、

いやもしかすると、豪放磊落ごうほうらいらくの大打者は、あまり深いことは考えていなかったのかもしれない。彼は、草壁に向かい、「そうだね。努力すれば、きっといい選手になる」と付け足した。

久留米はそこでも落ち着き払っていた。「何だかそんな風に、持ち上げてもらってありがたいです」と打点王氏に頭を下げた。「草壁、おまえ、本気にするんじゃないぞ」とも言った。「あくまでもお世辞だからな」

念押しする口調が可笑おかしかったから、いく人かが笑った。場が和なごんだといえ、和んだが、わざわざそんなことを言わなくとも、と僕は承服できぬ思いを抱いた。

「先生、でも」草壁が言ったのはそこで、だ。「僕は」

「何だ、草壁」

「先生、僕は」草壁はゆつくりと、3「僕は、そうは、思いません」と言い切った。

安斎の表情がくしゃつと歪み、笑顔となるのが目に入るが、すぐに見えなくなった。なぜなら、僕も目を閉じるほど顔を歪め、笑っていたからだ。

野球教室が終われば、教室に戻ることもなく、校庭で解散となった。記憶の場面ではそうだ。打点王氏が帰るのを、生徒全員で拍手で見送った後で校長先生の挨拶があった。それから、みながばらばらに帰路へ向かったのだが、僕と安斎たちはしばらく校庭に残っていた。

草壁が自主的に素振りをするのを眺め、それこそ、「プロ野球選手が褒めたから」という先入観があったからか、「言われてみれば、草

壁の素振りはなかなか上手だな」と感心し、「もつと前から、正式に野球をやっていたら良かったじゃないか」と余計なお世話を口にした。

「でも、不思議なもんだよね」草壁はその日、水を補給された植物さながらに、急に活力を得たのかもしれない。喋り方も明瞭めいりょうになっていった。「ちよつと褒められただけなのに、すごく嬉しい」と笑った。

(伊坂幸太郎「逆ソクラテス」『あの日、君とBoys』集英社より)

※1 フォーム：ここではバットを振る姿のこと。

※2 土田：「僕」や「安斎」「草壁」と同級生の男子。

※3 スウイング：ここではバットの振り方のこと。

※4 佐久間：「僕」や「安斎」に協力的な同級生の女子。

※5 豪放磊落ごうほうらいらく：心が広く、小さなことにこだわらない性格。

問二

線1「安斎は縦るような目で、打点王氏を見上げた」とありますが、この時の「安斎」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 打点王氏のことを信用するしかないが、それでも信用しきれず、彼が草壁の前で褒め言葉をはつきりと言うように要求している。

イ 打点王氏の次の言葉を期待する一方で、先ほどのフォームでは打点王氏からも取り合ってもらえないと思い、あきらめかけている。

ウ 草壁が予想以上に不恰好なフォームだったため、打点王氏から思い通りの褒め言葉を言ってもらえるとは思えず、次の言葉を緊張して待っている。

エ 草壁のフォームがひどいので、打点王氏の心情を推しはかかって心配になっているが、それでも約束の言葉を発してくれるよう願っている。

問一 線a「一瞥いちべつをくれ」・b「淡々たんたんといなす」とありますが、

本文における意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a 一瞥いちべつをくれ

- ア 目で意思を確認し
- イ 一声かけて
- ウ ちらりと見て
- エ 見下した態度をとり

b 淡々たんたんといなす

- ア 真剣に問いただす
- イ やむなく対応する
- ウ 簡単に受け入れる
- エ あっさりとしらう

問三 —— 線2「安齋が、『先生、黙ってて』と言いつつ」とあ

りますが、その理由の説明として最も適当なものを次の中から選
び、記号で答えなさい。

ア 不恰好なスウイングを繰り返す草壁や、それをからかう久
留米と生徒たちにいらだったから。

イ 打点王氏が草壁に声を掛ける絶好の機会を、久留米に邪魔
されなくなかったから。

ウ 打点王氏の言葉を引き出すには、自分がこの場で先生を制
しておく必要があったから。

エ 久留米と自分の立場を逆転させることで、生徒たちをこち
らの味方につけようと考えたから。

問四 —— 線3「僕は、そうは、思いません」とありますが、この

時の「草壁」の様子の説明として最も適当なものを次の中から選
び、記号で答えなさい。

ア また怒られるのではないかと内心びくびくしているため、
久留米の顔色をうかがいながら途切れ途切れに気持ちを伝え
ようとしている。

イ 打点王氏の励ましや周囲の後押しを得て、努力した先に道
が開けると思い始めており、久留米の言葉に負けないように
しっかり気持ちを表明している。

ウ 安齋の計画に薄々気づき始めているために、打点王氏の言
葉を否定した上に冷やかすような発言をした久留米に対する
抗議を明らかにしている。

エ 打点王氏から褒められた上に佐久間の援護も手伝い、さら
にここまで順調に安齋の計画通り事が進んだことに気をよく
し、久留米への恐怖心も忘れていた。

問五 —— 線4「僕も目を閉じるほど顔を歪め、笑っていた」とあ

りますが、この時の「僕」の気持ちの説明として最も適当なもの
を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 事前に草壁に伝えていたせりふが指示通り久留米にぶつけ
られたことをうれしく思うとともに、それを見て満足する安
齋に気づき、喜ばしく思っている。

イ 草壁が久留米に立ち向かった姿に感心し、今回の計画が予
想以上に上手くいったことを、安齋と同様に自分もうれしく
思っている。

ウ 草壁が久留米に対して正々堂々と意見した瞬間を目の当た
りにし、今後草壁が周りから見下されまいだろうと安心した
ため、気持ちが晴れ晴れとしている。

エ 久留米を見返したいとの思いから安齋の計画を利用したと
ころ、久留米との立場を逆転させることができ、痛快に思っ
ている。

問六 —— 線5「『でも、不思議な（嬉しい）と笑った』とあり

ますが、これについて述べたものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 久留米に認められないことを気に病んでいたが、打点王氏に褒められたことで行動や発言がこれまでになく前向きになり、その変化を自覚し喜んでいる。

イ 一流選手と会話ができ、励ましの言葉までもらって舞い上がり、これまでの無気力な性格から一変、プロ野球選手を目指そうというやる気がみなぎっている。

ウ 久留米に対して考えを伝え切った今回の出来事を通じて自信が付き、安齋や僕に対しても遠慮なく思ったことを口にするほどの勇氣や元氣を得ている。

エ 野球をそれほど好きではなかったが、打点王氏に褒められたことで、安齋や僕への感謝の気持ちをどのように表現したら良いかわからないほど舞い上がっている。

問七 〳〵線「本来の目的」とありますが、「安齋」や「僕」はど

のようなことをしようとしていたと考えられますか。本文全体をふまえて、ていねいに説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ことばにとつて、縦にするか横にするかはたいへんなことである。それなのに、いまの日本人は無神経にらんぼうなことをして平気でいる。それでいて、先年来、日本語ブームとやらがおこったというから笑わせる。ろくにことばを考えたこともないような手合のまきおこしたブームなら、実のあることは何もなくて、ただ風が吹いたから桶屋かづやがもうかる程度で終わってしまうのが落ちである。

雑誌『英語青年』をへんしゅうした英文学の外山滋比古としましげひこは一九八〇年、『ことばの姿』（芸術新聞社）という本の中で、日本語は縦書きすべし、という観点からこう書いている。書物や新聞が縦組みの一方で、国語を除く教科書や公文書、事務書類は横組み、とりわけワープロ、パソコンの浸透しんとうで横組み横書きはその度を進めている。——これが **A** な日本語の姿である。いわゆる「日本語ブーム」の中、このような日本語生活の中でいったい何が起きているのだろうか。

普通に考えれば、縦に書くか、横に書くかは、書字方向を立てるか寝かすかのささいな違いにすぎない。読む立場からは、縦組みの「雨が降る」と横組みの「雨さ降る」という文の間に違いはあるとしても、読みやすいか否か、読み慣れているかどうかという読み手の心理の問題にすぎないと考えるかもしれない。

だが、書く立場では異なる。文を書くことは、書きながら思考しつつ文を創ることであり、私のささやかな経験からいっても、書き手に

とって、縦書きの思考と横書きの思考とでは、異なる文と文体をもたらす。たとえば縦書きの思考から「雨が降る」と生まれ、横書きからは「雨が降ってきた」というような異なる文が生まれる可能性を否定できない。インターネット上に出現した「いいね！」式の気楽な呼びかけの文体は、横表示式のしかも「書く」ことを失った気楽さに生じているのではないだろうか。

ワープロ作文と手書きとの違いについて、かつて『文學界』二〇〇〇年二月号に「文学は書字の運動である」と題して書いたことがある（『書く』ということ）（二〇〇二年、文春新書）所収）。だが、それ以前に、縦書きと横書きとの違いについての理解が共有されれば、ワープロと手書きの違いなどはもはや説明するまでもないことになる。書の制作、また原稿執筆時の実感では、縦書きと横書きとでは表現がまったく異なっている。その違いの存在を広く共有することはできないだろうか。

そこで、まず私が教えている美術大学の学生諸君、二十七名を相手に実験してみることにした。四百字詰原稿用紙を二枚配り、まず最初の一枚に「私の人生について」という題で縦書きで作文を書いてもらう。制限時間は三十分。途中であつても手を止め、提出する。いささか重いテーマを選んだのは、現在の学生諸君の考えの一端でも知りたいと思ったからでもある。書き始めたときとたん数人が携帯電話（電子辞書）を机の上に持ち出したので、「辞書は使わなくてもいい。ひらがなでも、文字が間違ってもいいから」と釘を刺した。

三十分後に、同じテーマで今度は横書きで書いてもらった。条件は第一回の縦書きと同じ。「同一文でも、少し違った内容になってもか

まわらない」と言い添えた。

二枚の実験作文を提出してもらった後、縦書きと横書きとではどう違ったかと質問を投げかけた。私は三分の二くらいが「別に変わらない」、三分の一くらいが「何か違うような気がする」、その中の二、三名が違いについて明快に感想をいうことになるのではないかと前もって予想していた。たとえ二、三人でも違いを知ればよく、提出された作文の文体、内容を分析すれば、縦書きと横書きの違いはおのずと明白になると考えていた。

ところが、私の予想はまったく裏切られ、二十七名の全員が、両者の違いに気づき、きわめて明快に、感想を述べたのである。

まず「書きやすい」という意見が、縦書き、横書きの、双方共に出てきた。横書きに馴染んだ世代であるにもかかわらず、意外にも縦書きの方が書きやすいという意見が多く、「書きやすさ」の理由をいろいろな観点から述べた。はっきりと「文体が変わる」と断言した学生もいる。

縦書きについては、「文字が次々と流れるように書ける」、そして「文がまとまりやすい」。つまり文がまとまりやすいという意味で、書きやすいと答えたのである。むしろ逆に、「重い」「苦しい」「文が硬くなる」「文体が古くさくなる」という感想もあった。

横書きについては、意外にも否定的な意見が多かった。曰く「箇条書きになる」「文が長くなる」「どこまでも書けそう」、そして「**B**」に多かったのは、「文がまとまらない」「文がしまらない」。つまり、横書きの「書きやすさ」は気軽に言葉が浮かび、話がどんどん広がっていくという点に限られた。

私の予想をはるかに裏切つて、縦書きと横書きの違いを、二十七名の学生は体験し、理解していたのである。

かつて、学者やけい^①い^②えい^③者の集まる昼食会で、縦書き、横書きの違いについて話したことがある。その違いを大人たちは、冗談もしくは比喩^④と受けとめて会場は笑いにつつまれた。理解され難いだろうと考^⑤えていた私もそれにつられて笑いながら説明した。その場面^⑥と大学の教室での場面の違いに私自身、驚いた。

学者はともかく、作家までもが、ワープロで打とうが、手書きであろうが、文に変わりがあるはずがないと答える時代に、心理的にはともかく、縦書きと横書きで書かれた内容や文体が変わるなどという主張^{※2}は、マニアックな妄想^⑦と一笑に付されるに違いない。だが、二十七名の学生諸君はその違いをはつきりと認識したのである。

結論的にいえば、縦書きつまり垂直書きは文がまとまりやすく、また重いのである。

※3 むろん横書き（水平書き）の場合にも紙面の書き手から遠い方が天、近い方が地となり、天から地への重力が働く。しかし横書きは、この天に対する戦略を欠いた、重力線を横断する書法であり、雨のごとくに降る重力線をひたすらつき切り、走り抜けるところの書字法である。このため、次々と話題は浮かびやすいが、ついつい筆が走り、まとまりを欠いた文とならざるをえない。

（石川九楊『日本語とはどういう言語か』講談社より）

※1 インターネット上に出現した「いいね！」式

の気楽な呼びかけ：フェイスブックなどで見られる、自分の言葉で評価せずに「いいね！」

ボタンをクリックするだけの評価方法のこと。

※2 マニアックな妄想^⑦：かたよつていたり常識を外れていたりするため一般的には受け入れがたい考え方のこと。

※3 むろん横書きく地となり：縦書きは文字が上から下へ進み、横書きは行が上から下へ進むという意味で天地がある。

問一 線⑥のひらがなを漢字に直しなさい。

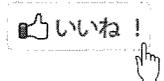
問二 A・Bに入る言葉として最も適当なものを次の中から

それぞれ選び、記号で答えなさい。（ただし、同じ記号を二度使つてはいけません。）

ア 専門的 イ 圧倒的 ウ 批判的 エ 戦略的 オ 一般的

問三 線1「書く」こととありますが、それはどのような

ことですか。文中から十六字でさがし、最初の五字を抜き出しなさい。



問四 ——線2「書きやすい」()出てきた」とありますが、そ

の理由の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 縦書きは文体を硬くする漢字に適しているという特長があり、横書きは文体をやわらかくするひらがなに適しているという特長があるから。

イ 縦書きは重みが出て説得力のある文が書けるといいう特長があり、横書きは気軽に言葉が浮かび話題がつきないう特長があるから。

ウ 縦書きは上から下へ字が流れるように書けるといいう特長があり、横書きは頭の中で文をねり上げられるという特長があるから。

エ 縦書きは文字が流れるように下へ向かって書けるといいう特長があり、横書きは発想が広がりやすいという特長があるから。

問五 ——線3「その場面と()驚いた」とありますが、この表現

の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 横書きに慣れていないはずの学生が、縦書きと横書きの違いを説明するまでもなく自覚できたのに、知性の高い大人たちが無自覚で説明を要することに筆者は違和感を覚えている。

イ 作文に対し意識の低かった学生が実験に取り組み、縦書きと横書きの違いを発見したのに、文書作成に慣れている大人たちが真剣に考えないのは良くないと筆者は考えている。

ウ 縦書きと横書きの違いを見出すため、学生が真面目に作文

に取り組み議論していたのに、大人はやさしい問題として取り合おうとしなかったことに筆者は腹立たしさを感じている。

エ 作文することに慣れていない学生が縦書きと横書きの使い分けの重要性に気づいたのに、文書作成に慣れているはずの大人たちが気づけなかったのは妙だと筆者は思っている。

問六 ——線「そこで、()実験してみることにした」とありますが、

実験結果からわかる「縦書き」と「横書き」の違いを五十字以内で説明しなさい。

三

次の会話文を読んで、——線①～⑤の敬語表現について、正しいものには1を、正しくないものには2を、それぞれ解答欄に書きなさい。(ただし、すべて同じ数字の場合は、採点の対象外とします。)

「ごめんください。」

「はい。」

「桐光学園小学校からおいでになった、六年三組担任の田村です。お母様は②いらつしやいますか。」

「母はいま外出中③でいらつしやいません。ご用件は何でしょうか。」

「本日家庭訪問④でうかがいましたが、いらつしやらないようですので、これで失礼⑤します。」

「それでは、田村先生が⑤まいったことを母に伝えておきます。」

「ありがとうございます。それではよろしく願います。」

【国語】

解答用紙(中学帰国生)

受験番号

氏名

得点

一

問

一

a

b

問

二

問三

問四

問五

問六

問七

